地理空間　**11**-3　243-251　2018

オーストラリアにおける自然遺産の登録前後の変化

堤　純
筑波大学生命環境系

オーストラリアは19の世界遺産をもち，なかでもおよそ2/3にあたる12が自然遺産である。それらの中から，シドニー近郊のグレーターブルーマウンテンズ地域（2000年登録）と，アデレード郊外のナラコート哺乳類化石地域（1994年登録）の2カ所を対象に，登録前後の状況，国や州などの関わり，末端の地方自治体の振興策などについて，関連資料の収集，自治体独自の統計調査結果の収集，および担当者への聞き取り調査を実施した。その結果，グレーターブルーマウンテンズ地域は100年以上前から高級リゾート地として人気を博してきた歴史があること，また，ナラコート哺乳類化石地域では自家用車による少人数グループでの訪問が主流であり，2カ所の観光地とも観光客の客層には大きな変化が確認できなかった。そのため，対象とした二つのオーストラリアの自然遺産では，世界遺産への登録前後における観光客数には顕著な変化はみられず，また，大規模ホテルや飲食店などの積極的な観光開発もみられず，世界遺産を取り巻く日本の典型的な状況とは事情が大きく異なるといえる。

キーワード：自然遺産，オーストラリア，観光開発，グレーターブルーマウンテンズ地域，ナラコート洞窟

Ⅰ　はじめに

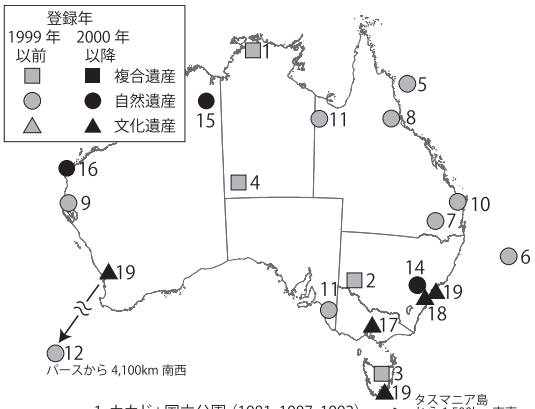
本稿は，ユネスコの世界遺産（自然遺産，文化遺産，複合遺産）登録地のうち，オーストラリアに存在する自然遺産の中から，シドニー近郊のグレーターブルーマウンテンズ地域（2000年登録）と，アデレード郊外の哺乳類化石地域（1994年登録）の2カ所を対象に，登録前後の観光客数の変化や施設整備に着目した上で，近年の新たな動向にも留意しながら，両地域の観光振興策の課題を検討することを目的とする。

研究方法は，対象とする二つの自然遺産の景観観察，および観光客の動向に関する統計資料の解析である。インターネット上に公開されている各種統計はもちろん，地元自治体が独自に集計した統計資料については現地調査において収集し，また，必要に応じて自治体担当者への聞き取り調査や観光客への聞き取り調査を実施した。

Ⅱ　オーストラリアの世界遺産

オーストラリアには，2019年3月現在，19の世界遺産が登録されている。それらのうち，自然遺産が最も多い12であり，文化遺産は3，複合遺産は4である（図1）。

オーストラリアで最初に登録された世界遺産は，1981年のカカドゥ国立公園（複合遺産：北部準州），グレート・バリア・リーフ（自然遺産：クインズランド州），ウィランドラ湖群地域（複合遺産：ニューサウスウェールズ州）の三つであり，その後，ウルル＝カタ・ジュタ（エアーズロックとマウントオルガ）のように，オーストラリアの自然環境や文化を象徴するような遺産の登録が1980年代と1990年代に続いた。2000年以降には，メルボルンの王立展示館とカールトン庭園（2004年：文化遺産），シドニー・オペラハウス（2007年：文化遺産），タスマニアのポートアーサーやメルボルン監獄などを含むオーストラリアの囚人遺跡群（2010年：文化遺産）といった文化遺産



1 カカドゥ国立公園（1981, 1987, 1992）
2 ウィランドラ湖群地域（1981）
3 タスマニアの原生地域（1982, 1989）
4 ウルル=カタ・ジュタ国立公園（1987, 1989）
5 グレート・バリア・リーフ（1981）
6 ロード・ハウ諸島（1982）
7 オーストラリアのゴンドワナ雨林（1986, 1994）
8 クインズランドの湿潤熱帯地域（1988）
9 西オーストラリアのシャーク湾（1991）
10 フレーザー島（1992）
11 オーストラリアの哺乳類化石地域（1994）
12 ハード島とマクドナルド諸島（1997）
13 マックォーリー島（1997）
14 グレーター ブルー マウンテンズ地域（2000）
15 パーヌルル国立公園（2003）
16 ニンガルー・コースト（2011）
17 王立展示館とカールトン庭園（2004）
18 シドニー・オペラハウス（2007）
19 オーストラリア囚人遺跡群（2010）

図1　オーストラリアの世界遺産

11および19については，距離的に大きく離れた地点が登録されているため，マーカーを複数配置した．
（ユネスコのホームページをもとに作成）

の登録がみられ，最も新しいものは，2011年に登録されたニンガルー・コースト（自然遺産：西オーストラリア州）である。

Ⅲ　世界遺産登録地における観光動向の変化

1．グレーターブルーマウンテンズ地域

グレーターブルーマウンテンズ地域は，オーストラリア大陸の東海岸に沿って続くグレートディヴァイディング山脈に位置しており，オーストラリア最大の都市シドニーから西に約60～100kmにわたって広がる丘陵地帯である。イギリスによる1788年の植民地化以降，19世紀に開拓が本格化する中で，内陸への主要な交通路として拓かれたルート上に，グレーターブルーマウンテンズ地域は位置している。この地で観光客に最も有名な地点は，侵食が進んで尖塔のような形をした砂岩が三つ連なるスリーシスターズである（図2）。グレーターブルーマウンテンズ地域は103万haにおよぶ森林地帯であり，内陸の砂岩でできた高原が深く侵食されたものである（図3）。この登録地は八つの保護地区からなり，道路と都市によって二分されている。広範囲にわたる調和の取れたユーカリの生息地であり，湿性，乾燥硬葉樹や灌木の荒地から，特有の沼地，湿原や草原などに90種のユーカリ（世界の13%）がこのブルーマウンテンズ地域に生育している[1)]。グレーター



図2　スリーシスターズを眺めるエコーポイント展望台

（2016年9月撮影）

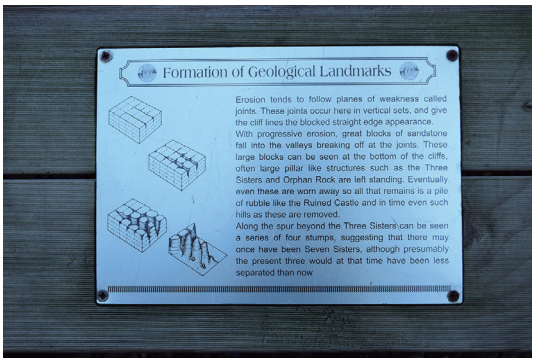


図3　グレーターブルーマウンテンズ地域における砂岩の侵食過程

（Scenic Worldの展示看板より：2016年9月撮影）

ブルーマウンテンズ地域の標高は約1,000mあり，大陸東岸から西に向かって水蒸気を多く含む雲がこの丘陵地帯に多くの雨をもたらしている。この地の年間降水量は約1,400ミリあり，オーストラリアの中では多雨地域である。こうした環境が，独特の植物相を育んでいる。オーストラリアの山林地域は，ブッシュファイアー（山火事）のためにユーカリのみのほぼ単一の樹相になることが珍しくないが（堤, 2018b），グレーターブルーマウンテンズ地域にはユーカリのみならず，シダ類，コケ類なども多く繁茂しており，豊かな植物相を形成しており，野鳥なども多く生息している。

グレーターブルーマウンテンズ地域の中心都市はカトゥーンバ（Katoomba）である。カトゥーンバはシドニーから約100kmの位置にあるものの，交通条件は比較的良好である。鉄道の場合は，シドニー中央駅からカトゥーンバ駅まで直通のサービスがおよそ30分おきに運行されている[2)]。シドニーからカトゥーンバまでの所要時間は約2時間である。一方，自家用車の場合は，高速道路のM4とA32により，約1時間半で結ばれている。シドニー大都市圏の範囲は，おおむねシドニーのCBDから半径50km程度と言われているが（堤, 2018a），西側の郊外だけは，例外的にカトゥーンバ付近まで約100kmにわたって住宅地の拡大がみられる。カトゥーンバの駅前には，1882年に開業したカリントンホテル[3)]（The Carrington Hotel）があるほか，カトゥーンバの一つ西側の駅に相当するメドゥロウバス（Medlow Bath）駅前には，1904年に開業したハイドロマジェスティックホテル（The Hydro Majestic）が立地している[4)]。これらの荘厳な造りの高級ホテルに代表されるように，カトゥーンバは100年以上前から高級リゾート地として，清涼な空気と森の環境を好む著名人らの人気を博してきた地域である。また，オーストラリア人の新婚旅行先としても最も人気の高かった地域の一つであるといわれている。1905年に掲載されたグレーターブルーマウンテンズ地域の観光広告によれば，カリントンホテルは南半球最大で最も有名な観光ホテルとして紹介されている（Low, 1991）。

スリーシスターズが良く見える地点には，観光案内所とエコーポイント展望台が整備されている。図4は，エコーポイント展望台における観光客数を表している。この図によれば，観光客数のピークは1990年代半ばであり，その後は，年間

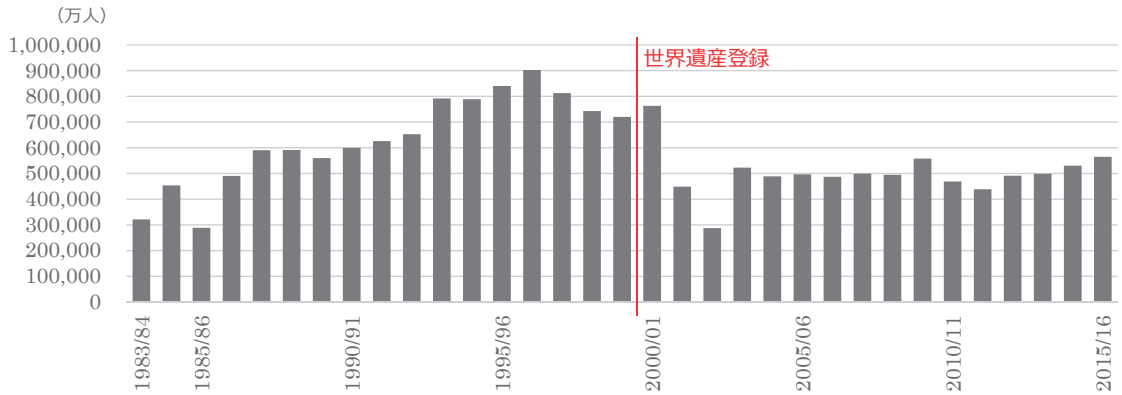


図4　エコーポイント展望台の観光客数（1983～2016年）

2001/02および2002/03年のデータの一部は欠損値を含む.

（ブルーマウンテンズ市役所の資料により作成）

50万人程度で安定して推移している。そのため，2000年にブルーマウンテン地域が自然遺産に登録されたことの影響を確認することは困難である。図5は，ブルーマウンテン地域における観光客の主要な滞在目的を表している。この図によれば，最大の滞在目的は飲食（57.6%）であり次いでブッシュウォーク（33.4%），景観観察（32.7%），国立公園訪問（31.5%）などが続いていることがわかる。

グレーターブルーマウンテンズ地域では，平坦面と谷の部分の標高差が最大で400ｍと大きいことから，いくつかの滝が発達しており，それぞれが観光名所となっている。図6は，スリーシスターズから約2km東側に発達したゴードン滝である。ブルーマウンテン地域では，観光客が1日に何度でも乗り降りできる有料バスを運行しており，最寄りのバス停から30分近く歩いた先に，ゴードン滝がある。また，大階段（ジャイアントステアウェイ）を使って侵食崖（400m高度差）の下まで歩いて降りて，谷底に広がる森林の中を歩いて植生や野鳥を楽しむブッシュウォーク（図7，図8）は，所要時間が2～3時間もかか

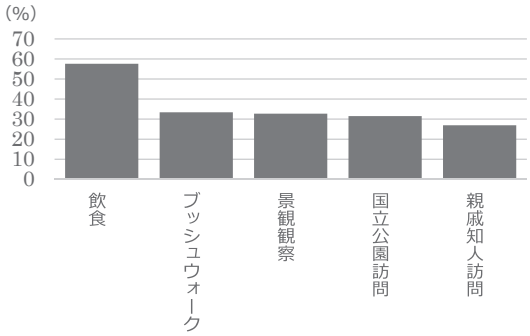


図5　グレーターブルーマウンテンズ地域への訪問目的（2015年）

（ブルーマウンテンズ市役所の資料により作成）



図7　ブッシュウォークのための標高差400ｍの大階段

（2015年9月撮影）



図6　ゴードン滝

（2016年9月撮影）



図8　ブッシュウォークトレイル

（2016年9月撮影）

るが，人気が高いアクティビティの一つである（Leonard Cronin Production, n. d.）。ただし，滝見物やブッシュウォークを楽しんでいる観光客の大半（筆者の印象では9割以上）は白人観光客である。一方で，筆者が2016年9月に実施したブルーマウンテン市役所およびエコーポイントの観光案内所における聞き取り調査によれば，近年ではアジアからの観光客が増加傾向にある印象だという。図9に示すような韓国人グループや，他にも中国人グループ向けのパッケージツアーも増加傾向にあるという。前述の通り，ブルーマウンテンズ地域はシドニーの都心部からのアクセスが良好なことから，このような中小型バスや自家用車を使って比較的少人数で訪れる観光客も増加傾向にあるという。また，調査対象者が，アジアからの観光客に対して異口同音に挙げた事項は，“Only a few minutes, only a few dollars!”（ほんの少しの時間しか滞在せず，お金もほとんど使わない）であった。こうした観光の現場に携わる当事者の印象は，登録前後で大きな変化はみられないとする図4のデータと比べると，やや異なる傾向を示していると分析することもできる。

2．哺乳類化石地域（ナラコート洞窟）

次に，オーストラリア大陸の南と北に位置する二つの地区にまたがり，1994年に登録された哺乳類化石地域では，いずれも貴重な化石が発掘されている。クイーンズランド州・リバスレーでは2,500万～500万年前，南オーストラリア州のナラコート洞窟では20万～1.8万年前の化石が発見された。これらの地域は，哺乳類（とくに有袋類）のルーツや進化を知るうえで貴重な場所である[5)]。本稿では，ナラコート洞窟を事例とした。

ナラコートは，ヴィクトリア州と南オーストラリア州の州境付近に位置し，メルボルンから約450km，アデレードからは約350kmの地点にある。メルボルンとアデレードを結ぶ幹線道路はA8であるが，ナラコートはA8から約100km離れた位置にある。一方で，ナラコートはライムストーン・コースト（石灰岩海岸）と呼ばれる南オーストラリア州の観光では主要道路の一つであるA66の沿線に位置している[6)]。石灰岩の名を冠した地名に象徴されるように，ナラコートの一帯には石灰岩が広く分布しており，また，周辺にはナラコート川をはじめとする小河川が多く存在する。石灰岩と豊富な水に恵まれるという地形・地質条件および気候条件から，ナラコートの一帯には広大な鍾乳洞が発達している（図10）。その一つがナラコート洞窟である。ナラコート洞窟で哺乳類化石が多く発見された理由は，石灰岩



図9　外国人観光客のためのマイクロバス
（2016年9月撮影）



図10　ナラコート洞窟の内部
（2017年8月撮影）

土壌の上に地表水が溜まり，やがて地下に出来た空洞（鍾乳洞）までとの間が陥落して，直径50cm程，落差10ｍ前後の垂直状の穴が多く空き，その穴に動物が落ちたことに起因している（図11）。これらの動物遺骸の中には，オーストラリア大陸への人間の登場以前に絶滅したといわれるティラコレオ科の有袋類であるフクロライオン[7]（marsupial lion：学名 Thylacoleo carnifex，別名：タスマニアタイガー）や，現在は存在しない肉食のカンガルー，その他にもネズミやトカゲなど，現在も存在する動物の遺骸が含まれる。大型の動物は，穴に落下した際の衝撃により死亡したと考えられ，骨格が完全な状態で発見されたものもある。これらの化石からは，氷河期・間氷期などの気候変動に対応した動物相（megafauna）の変化を知ることができ，科学史上の貴重な資料である。一方で，ナラコート洞窟からは，骨格がバラバラな状態の骨も多く発見されている。この理由としては，先住民のアボリジニがこの洞窟の存在を知り，洞窟内に生息していた動物を捕らえ，洞窟内で解体処理したからではないかと考えられている[8]。

ナラコート洞窟における哺乳類化石は，アデレード大学の研究者グループによって1969年に発見された[9]。自然遺産への登録以前は，観光地としての整備はほとんど行われておらず，地元自治体のみが細々と関与する程度であった。その後，前述の通り，自然遺産として1994年に登録されると，オーストラリア連邦政府および南オーストラリア州政府を通して観光施設の整備に関する補助金が拠出された。その結果，ナラコート洞窟ビジターセンターを核として，観光案内板や遊歩道の整備が行われた。洞窟内にはほとんど照明が無く，ガイドツアーの参加者はガイドが照らす懐中電灯のわずかな明かりだけで洞窟内を進む。そして，洞窟内のいくつかのポイントに達した時点で，ガイドが効果的に照明を点け，そこには，映し出された影が洞窟内に大きく投影されるように演出された動物の骨格標本が現れる（図12）。ここが洞窟内のガイドツアーのクライマックスである。

図13は，ナラコート洞窟ビジターセンターの訪問者数の推移を表している。1998年のオープン当初は，年間7万人程度で推移しており，その後2010年前後には6万人程度に減少しが，2016年度[10]には7万人程度にまで回復している。この統計からは，自然遺産登録の前後で観光客数が急増するといった影響を読み取ることは困難である。しかし，ビジターセンターや観光案内板，遊



図11　ナラコート洞窟内の化石展示
（2017年8月撮影）



図12　ナラコート洞窟内における化石展示時の照明演出
（2017年8月撮影）

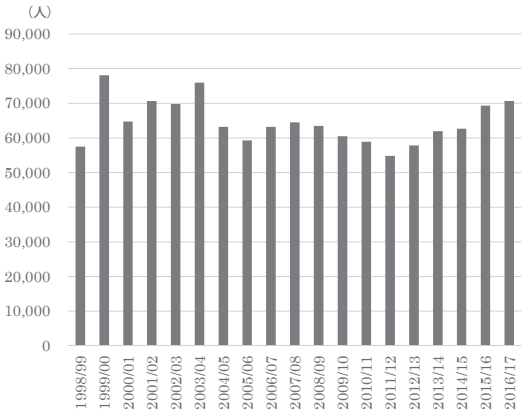


図13　ナラコート洞窟の観光客数（1998～2017年）
（ナラコート・ルシンデイル市役所の資料により作成）

歩道の整備，洞窟内の照明演出などによって，ナラコート洞窟が見学しやすくなったことも事実である。近隣の学校からの団体客の受け入れも定期的に行われているため，毎年一定数の訪問客が見込まれていると解釈することもできる。

また，本節の冒頭でも記した通り，ナラコート洞窟は幹線道路のA8からは離れているものの，ライムストーン・コースト観光地域を貫く主要道路A66の沿線に位置している。アデレードから自家用車で訪れる観光客は，近隣の一大ワイン生産地クナワラ（Coonawarra）や，海岸部のマウントガンビア（Mount Gambier）のブルーレイクを代表とするカナウィンカ（Kanawinka）ジオパーク，美しい海岸線で有名なクーロン（Coorong）国立公園，新鮮なシーフードとワインで有名なローブ（Robe）などを周遊するついでに，ナラコート洞窟にも立ち寄ることが多い。こうした，自家用車1台に乗れる小人数のグループが，ナラコート洞窟の主要な観光客である[11]。

Ⅳ　世界遺産登録前後の課題

このようにみてくると，二つの事例地域においては，自然遺産登録の前後における変化は明瞭ではない。誤解を恐れずに印象を述べれば，登録前後での変化はほとんどないというのが実態である。グレーターブルーマウンテンズ地域は，自然遺産登録のはるか前，すなわち100年以上前から保養地として人気を博してきた実績がある。大都市シドニーからのアクセスについては，登録の前後での変化はとくにない。近年ではアジア系の観光客が増加した印象はあるというが，これは，国外からのインバウンド観光客の増加というよりは，シドニーの人口が過去10年に70万人も増加し，多文化化が強まった（2006年に412万，2011年は439万，2016年は482万）ことの影響ととらえる方が自然ではないだろうか。課題として挙げられることは，ミニバンやマイクロバスでグレーターブルーマウンテンズ地域を訪れ，スリーシスターズだけを見てすぐにシドニーに引き返してしまう観光客に対して，現地での飲食や宿泊を選んでもらえるような取り組みが必要であろう。

また，ナラコート洞窟の方も，こちらも誤解を恐れずに印象を述べれば，登録前後での観光客数の変化はほとんどないというのが実態である。ナラコートから約100km南に位置するカナウィンカジオパークでは，自治体のみならず，地元の観光業者や市民を巻き込んだ観光振興の取り組みがみられるが（Isono, 2015），ナラコート・ルシンデイル市の中心部には駐車場を完備したモーテルが数件ある程度であり，観光客向けの飲食店も宿泊施設も十分ではない。市の観光開発当局の担当者によれば，今後もとくに大きな開発計画は存在しない状況だという[12]。オーストラリアでは，とくにリゾート的性格の強い地域では，観光開発といえば世界的に名の知れた大手のホテルチェーンが進出するかどうか，つまりそれだけの旨み（≒観光客数の急増）が見込めるかどうかが意思決定の重要なポイントである。一方で，オーストラリアの主要道路の沿線には，数10km間隔で並ぶ小

さな街ごとに，オーストラリア全国チェーンの小規模なモーテルやスーパーマーケット，ファストフード店などが立地している。自家用車で少人数グループで訪れる観光客にとっては，ナラコート洞窟は「たまたま立ち寄る」程度の観光地であり，宿泊や飲食はクナワラのワイナリーや，ローブのシーサイド観光地の方がよいというのが実態なのだと思われる。こうした，オーストラリアにおける「ドライ」な側面は，世界遺産登録を契機に過大な観光開発が行われたり，ご当地グッズの販売がにわかに始まることの多い日本の典型的な状況と比べると，事情がずいぶん異なるといえる。

V　おわりに

本稿は，ユネスコの世界遺産（自然遺産，文化遺産，複合遺産）登録地のうち，オーストラリアに存在する自然遺産の中から，シドニー近郊のグレーターブルーマウンテンズ地域（2000年登録）と，アデレード郊外の哺乳類化石地域（1994年登録）の2カ所を対象に，登録前後の観光客数の変化や施設整備に着目した上で，近年の新たな動向にも留意しながら，両地域の観光振興策の課題を検討することを目的とした。

紙幅の都合から，明らかになった点をここで繰り返すことは省略するが，特筆すべき点を一つ挙げておくとすれば，オーストラリアでは世界（自然）遺産の登録前後における顕著な変化はみられないことである。また，登録前後において観光客数の大幅増加がみられなければ，大手資本によるホテルや飲食店開発も行われないという点にも，投資額とリターンをシビアに見極めるオーストラリア人のドライさが垣間見られる。本稿でみられたオーストラリアの特徴を，日本やヨーロッパなどの世界遺産登録前後の動向と比較検討することは，今後の課題としたい。

［付記］

本稿はJSPS科研費補助金「世界遺産の創造と場所の商品化に関わる理論的・実証的研究」（基盤研究A　研究代表者：松井圭介）による成果の一部である。現地調査では，Ms. Wendy Dollinをはじめとするブルーマウンテン市役所観光開発課のみなさま，そしてMs. Dr. Helen Macdonaldをはじめとするナラコート・ルシンデイル市役所のみなさまから，貴重なデータを提供していただいたほか，各市独自の取り組みについて詳細な解説をいただきました。以上記して感謝申し上げます。

注

1）ユネスコ世界遺産のホームページ https://whc.unesco.org/en/list/917（最終閲覧日：2019年3月15日）

2）シドニー大都市圏郊外鉄道のブルーマウンテン線の下り終着駅は，カトゥーンバの3駅西側のマウントヴィクトリア行き，またはグレートディヴァイディング山脈を下山したリスゴー（Lithgow），バサースト（Bathurst）行きである。https://transportnsw.info/documents/timetables/93-BMT-Blue-Mountains-Line-20190105-20190427.pdf（最終閲覧日：2019年3月15日）

3）カリントンホテルは，1882年の開業時にはThe Great Westernであったが，その後，ニューサウスウェールズ植民地の知事（Governor：当時）の名にちなんでカリントンホテルと改名された。

4）ハイドロマジェスティックホテルは，水治療法（hydropathic spa）を行うための保養地として設立された。1920年には元オーストラリア初代首相（在任1901年1月～1903年9月）のエドモント・バートン（Sir Edmund Barton）が心臓麻痺のため，このホテルに滞在中に死亡した。その他，イギリス人作家のコナン・ドイル（Sir Arthur Conan Doyle）をはじめとする著名人が好んで滞在した。http://www.hydromajestic.com.au/home/our-history（最終閲覧日：2019年3月15日）

5）ユネスコ世界遺産のホームページ https://whc.unesco.org/en/list/698（最終閲覧日：2019年3月15日）

6）南オーストラリア州政府観光局およびカンタス航空のホームページ https://style.qantas.jp/area/sa/adelaide/suburb/limestone_coast/（最終閲覧日：2019年3月15日）

7）Australian Museumのホームページhttps://

australianmuseum.net.au/learn/animals/mammals/thylacoleo-carnifex/（最終閲覧日：2019年3月15日）

8）2017年8月28日，ナラコート・ルシンデイル市役所における聞き取り調査による。

9）前掲8）。

10）オーストラリアの会計年度は7月1日～6月30日までである。そのため，各種統計も2年間にまたがるような表記になることが通例である。本稿では，便宜上，1998年7月1日～1999年6月30日まで（1998/99）について，1998年度と表記した。

11）前掲8）。

12）前掲8）。

文　献

堤　純（2018a）：『変貌する現代オーストラリアの都市社会』筑波大学出版会.

堤　純（2018b）：気候変動と自然災害が人間社会へもたらす影響．宮崎里司・樋口くみ子編『サスティナビリティ・サイエンスとオーストラリア研究：地域性を超えた持続可能な地球社会への展望』オセアニア出版社，15-28.

Isono, T.（2015）：Development process of geotourism in the Kanawinka Region in the context of the Australian geopark movement. *Tsukuba Geoenvironmental Sciences*, **11**, pp.1-11.

Leonard Cronin Production（n. d.）：*Exploring The Blue Mountains*. Envirobook, Annandale, New South Wales, 176p.

Low, J.（1991）：*Pictorial Memories Blue Mountains*. Kingsclear Books, Alexandria, New South Wales, 136p.

Changes in Australia around the Time of World Natural Heritage Registration

TSUTSUMI Jun

Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

Keywords: Natural heritage, Australia, Tourism development, Greater Blue Mountains Area, Naracoorte cave